

和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

みなちがさ

# 皆地笠

平成2年指定 / 指定された地域(田辺市)

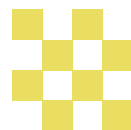
## 熊野の山々が生んだ暮らしの工芸品

温暖多雨な気象条件のもと、うっそうとした森が幾重にも重なり、熊野の山々を形成します。その山間にひっそりと佇む集落が本宮町皆地。この地で古くから作られている伝統工芸品が「皆地笠」です。素材は熊野の香り高い桧で、笠は山里の暮らしが生んだ生活の道具。雨具であったり、日よけであったり、また熊野詣の参詣者も愛用したという深い歴史を持っています。



● 桧細工職人  
芝安雄さん

大正10年生まれ、本宮町皆地出身。特産品の皆地笠をはじめ、茶道具の炭とりや花器を手掛ける桧細工の職人。先代である芝さんの父も、祖父もこの地で細工師として活躍し、3代目を継承。桧とともに育ち、遊びの中で技と知識を修得。原材料である桧の見立てから採取、細工をするための“ひよ”づくり、細工まで、現在、伝統の技を伝えるのは芝さんただひとりです。



## 貴賤なく熊野詣の参詣者も愛用

「皆地笠」の起源を辿っていくと、平安時代までさかのぼります。その昔、源平の戦いに敗れた平家の公達(きんたう)が、追っ手から逃れてこの地に隠れ住みました。日々の生計を支えるために、熊野で産出する香り高い桧材を使って、笠を編み出したのが始まりとされています。もともとは「貴賤笠」と呼ばれていたもの。その由来は、熊野に詣でる参詣者からきており、上皇から貴族、庶民まで、身分の貴賤に関係なく広く愛用されていたことから命名されました。いつからか特産品として産地名で呼ばれるようになり、現在は皆地笠の名で知れ渡っています。

## 山が育ててくれる経験と熟練の技

「昔は分業で笠を作っていたんですよ。簡単な部分は小遣い稼ぎに女性や子どもが編む。そうやって私も自然と技を身に付けていました」。現在、村で唯一の細工師である芝安雄さん。大正10年生まれ。今では皆地笠を作れるのも、芝さんひとりになりました。戦前には8軒ほどの工房があり、材料の採取や、細工のための“ひよ”づくりなど、村全体で分業。林業や農業関係者からも引き合いがあり、九州や四国方面へも出荷していたそうです。しかし戦後、生活のために林業労務に人が移行。笠を作る人が減少しました。「編むことはできても、桧の見立てとひよづくりは、長年の経験と熟練の技。弟子入りの志願者もいましたが、その難しさにみんな断念してしまいました。」



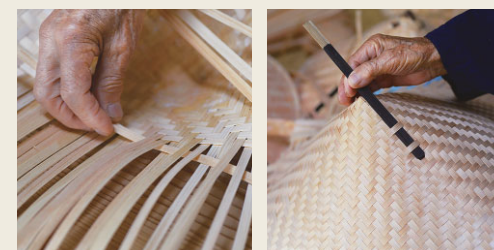
## 桧は鼻孔をくすぐる森の香り

皆地笠は、樹齢60年以上の節の少ない、真っすぐに伸びた桧を使います。ねばりがあり折れにくく、それでいて軽くて光沢があり、年月が経てば銚色のいい艶を出す素材。8月～9月にかけて職人は山へ入り、細工に適した桧を見立てて採取。切り出した桧をカンナで削り、細工する短冊状のひよを作って、のりも接着剤も使わずに一枚一枚をつぎ合わせ、笠を編み込んでいきます。皆地笠の大きな特徴はその香り。かぶるとふんわり爽やかな森の香りが鼻孔をくすぐります。桧の油分が水を弾き、雨の日はもちろん日よけにも最適。今でも、川釣りや農家の方々、熊野古道を案内する語り部たちにも重宝されています。

## 【皆地笠の制作工程】



8月～9月に切り出した桧材をひよに加工。専用のカンナで削り、編む場所によって異なるひよの厚みは、熟練の技と勘で見極めます。



ひよを互い違いにくぐらせ、網代編みで本体を形づくり。補強の竹と桜の皮を差し込む場所を計算しながら形よくついでいきます。

編み上がった本体の笠を竹3本で補強。ふちは太めの編み紐で包み込んで強化します。裏に頭を入れる笠台を麻糸でとめて完成です。

## 人生を賭ける伝統の皆地笠

皆地笠のほか、修験者がかぶる「行者笠」や比叡山延暦寺の行者がかぶる「阿闍梨笠」など、奈良や京都の寺社仏閣で使われている笠も、芝さんが手掛けていました。熊野参詣の際に女性がかぶったとされる「市女笠」も再現。さらに、茶道の家元好みの茶道具も桧細工で作る技と作品が各方面で高く評価され、昭和60年に黄綬褒章を受賞しています。「熊野古道が世界遺産に登録されてから、海外の人も増えてきました。わざわざ家まで訪ねてきますよ。世に出してみんなに喜んでもらえるのが何よりです。」高齢のため数や種類が作れず、最近では皆地笠だけにしぼって制作。芝さんの作品は、工房兼自宅、または本宮町の道の駅で販売。「手仕事の良さはいい材料と手間ひま。時間は掛かりますが、元気なうちは生き甲斐として作り続けます。」と、皆地笠に人生を賭けます。

